

<b>The Sweetest Sound</b>
甘き調べ
<b>Romantic Jazz Trio</b>
ロマンティック・ジャズ・トリオ
<b>1. ラ・コンパルサ</b>
La Comparsa 〈E. Lequona〉(3:53)
<b>2. マイ・メランコリー・ベイビー</b>
My Melancholy Baby 〈E. Burnett〉(6:39)
<b>3. アンド・アイ・ラブ・ハー</b>
And I Love Her 〈J. Lennon〉(7:09)
<b>4. ジェントル・レイン</b>
The Gentle Rain 〈L. Bonfá〉(6:39)
<b>5. 甘き調べ</b>
The Sweetest Sound 〈R. Rodgers〉(4:57)
<b>6. ドゥルメ・ネグリータ</b>
Drume Negrita 〈E. Grenat〉(4:56)
<b>7. イン・マイ・ソリチュード</b>
In My Solitude 〈D.Ellington〉(5:14)
<b>8. ザ・ランプ・イズ・ロウ</b>
The Lamp Is Low 〈P. Deroose, B. Shefter〉(4:40)
<b>9. ザ・シングス・アイ・ラブ</b>
The Things I Love 〈P. Tchaikovsky〉(6:19)
<b>10. ユー・マスト・ビリーブ・イン・スプリング</b>
You Must Believe In Spring 〈M. Legrand〉(9:12)
<b>11. ある恋の物語</b>
Historia De Un Amor 〈C. Almaran〉(5:14)

**ジョン・ディ・マルティーノ** John Di Martino (piano)
**ウゴンナ・オケゴ** Ugonna Okegwo (bass)
**グラディ・テイト** Grady Tate (drums)

録音：2003年8月30、31日　アヴァター・スタジオ、ニューヨーク

© 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

\*

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Recorded at Avatar Studio in New York on August 30&31, 2003.
Engineered by David Darlington. Assistant: Aya Takemura.
Technical Coordinator by Derek Kwan.
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound: Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Front Cover: © Irina Ionesco / G. I. P. Tokyo.
Artist Photos: John Abbott. Designed by Taz.

ただのロマンチックなんぞではぜんぜんない。有名なビートルズの「アンド・アイ・ラブ・ハー」も選曲されています。風格ですよ、この演奏の持ち味は。唯の「アンド・アイ・ラブ・ハー」ではない。

キューバの偉大な作曲家、エルネスト・レクオーナの曲が入っていて一段と嬉しくなりました。「ラ・コンパルサ」と「ドゥルメ・ネグリータ」ですが、重いです。アドリブでラテンの風味と黒人のスピリチュアルな味付けが交錯します。低く深く、凄じ聴きどころとなりました。

こんなふうに、一曲として「弾き飛ばして」いるところがありません。ぜんぜん一丁上がりではないのです。

実はこのピアノ・トリオ、先にヴィーナスから発売された女性ヴォーカリスト、シモーネの録音の折、伴奏グループとしてスタジオに現れたらしいのです。

歌に耳を傾けつつ、一方ピアノ・トリオの動きを見ると、これが今、ここで聴けるような重く雄大な、そして格調正しいものだということがわかりました。「これはこれで一つやらなければいかな」プロデューサーの頭にひらめいたのはこのことでした。

「ミュージシャンたちを見ていると面白いね。いろいろな発見がある。一人、一人つぶさに眺めるんだよ。すると、例えば次はこのベースをリーダーにしてみようとか、ドラムを親玉に仕立てようとか、他の誰かと組み合わせると面白いんじゃないとか、いろいろ即興的アイデアがわいてくるんだ」

いや、羨ましいの一言です。プロデューサーなんて、本当いい仕事しています。ジャズ・ファンなら誰だって一度は経験してみたい。

このピアノ・トリオをお買いになったあなた。そう、あなたです。得をしましたねえ。

当たり！だったんですよ、要するに。あなたがもしベテランのジャズ・ファンだったら、躊躇したでしょう、一瞬。なんていったってタイトルが『ロマンチック・ジャズ・トリオ』ですものねえ。

私のようなベテラン・ファンは、ジャズについて実に厳しい「教育」を受けてきました。その一つに、ジャズはロマンチックであってはいけない、という項目があるのです。というのは冗談ですが、ジャズはパワフルでエネルギッシュで探求的で、エキゾチックでなくてはならず、決してロマンチックなんぞであってはいけなかったのです。

本当はビル・エバンスなどはロマンチックなピアノなんですけどねえ。ロマンチックに目をふさいで妙に難解に仕立て上げて、どうも私などは、これまでのジャズ界は間違いを犯してきたのではないかと思ってしまうわけです。

ジャズがロマンチックでどこが悪い！　その一言をいうために原稿紙1枚を費やしたわけですが、ロマンチックだって立派なジャズの要素の一つだと思いますね。

ジャズ・ファンは聖物ばかりではないのです。いつもゴリゴリのハード・ドライビング・ジャズって言うんですか、そんなのばかり聴いているわけではない。むしろ、そんなのを聴かれるケースはまれではないか、と私などは考えますね。要するに本音と建前が横行するのがジャズの世界なのです。

まあどんなジャンルでもそうですね。レベルが高くなればなるほど。

私などは近頃ロマンチックなジャズをメインに聴きたい。たまにはいいですけど基本的にゴリゴリは体調絶好調の時以外お断わりです。建前はほんの時たまでいいのです。ジャズは本音でゆきましよう。

本音でゆくとなると、例えばこのCDなどが突如として浮上してくるわけです。

実にいいCDですよ。

『ロマンチック・ジャズ・トリオ』は内容について命名されたわけですが、私は特に曲選びにえらくロマンチックなものを感じました。なかなかこれはハードな手間ひまがかけられています。考え抜かれています。

この人たちは普通の高名な恵まれた人たちではありません。ジャズの世界の底のほうで苦勞してきた人たちではないでしょうか。いろいろなところでいろいろな人たちの前で演奏して。

人々がいちばん喜ぶのは「いい曲」です。いい曲といってもただの有名人ナンバーではない。ふだん聴かれない曲で、「ああ、こんないい曲があったのか」という要素の曲が大事ですし、それから曲に演奏する人たちの思い入れがあることが重要でしょう。聴いている人たちはそのあたりのニュアンスを一瞬に見抜きます。このミュージシャンたちはそういう人を意識しました。

思い入れは「曲あしらい」にも表れます。例えば「マイ・メランコリー・ベイビー」ですが、私はこの曲が大変好きなので、い一番にボタンを押しました。すると、いや実にピアニストの思い入れが濃厚に感じられるのです。この曲のあしらいに関しては、むしろこのCDはジャズ・マニア向けと言ってもいいくらいなものでしょう。500回くらいいろいろな「マイ・メランコリー・ベイビー」を聴いてきた人が手を打って喜ぶ、そういう「マイ・メランコリー・ベイビー」です。

小唄が一級のアート曲に格上げされているんです。このトリオはゆるがせには出来ないぞ。この曲を耳にして私は背すじを直しました。

もう一度このCDの話に戻します。

このCDは前述したように曲を楽しむ作品です。このことは特別なことでもなんでもありません。近頃のピアノ・トリオのCDは多かれ少なかれ、そんなような風潮の聴かせ方をするように作られています。それでピアノ・トリオを皆、大好きになっているのです。

以前のように曲はどうでもよく、ただピアニスト、あるいはサイドメンの「個性」で聴かせるというあり方が段々と希薄になってきました。個性豊かなミュージシャンがいないというより、我々近頃のジャズ・ファンがもうそんなに強く「個性」を求めなくなってきているのではないか、というのが私の見解なんですが　。そういう時代なんですよ、今は。パウエルやモンクやエバンスやハンコックなど、はっきり言ってしまうともう「しんどい」という感じすらしないでもありません。重圧ですな、一種の。曲なんか楽しんでるひまはありません。「その人」を、そして「その人の音楽」を聴かなければいけないという義務感みたいなもの。

もう、たくさんです。個性を求めるなどやりたい人はやればいい。誰もやってはいけないとは言っていない。しかし、そうしなければジャズをわかったことにならないという無言の風圧があったりすると「ふざけるな！」と私などはこぼしを上げたくなくなるのです。

もう、自由に聴いていいじゃないか。もちろんこのCDをお買いになった9割くらいの人は自由の人、でしょう。くだくだしい私の話を「こいつ何言ってるんだ」そんな気持ちで読んでいる方もいらっしゃるでしょう。それならそれでいいんです。大いにいいです。私がかえって嬉しい。私自身が、今、そういう自由な聴き方をしていますから。

今日はちょっと軽めに「ジェントル・レイン」を聴きたいな、と思ったらそのボタンを押せばいいんです。

それにしてもこの曲、近頃、ずいぶん新しいミュージシャンを含めて、いろいろな人にピアノ・トリオで演奏されますね。昔は「ヒアズ・ザット・レイニー・デイ」でしたが、雨というと今は「ジェントル・レイン」なんですよ。そのどれもがいいんですよ。今のピアニストの心象風景にぴったり合った曲想なんでしょうね。

そういうことがジャズということだと思います。時代の移り変わりなのです。レッド・ガーランドの古いプレステージ盤から聴こえる「レイン」もいいんですけどね。いや、私などからするともはや、ちょっと違う感じかな、と。『シモーネ』盤のライナーノートを覗いてみました。ピアニストの紹介があります。

ジョン・ディ・マルティーノはイタリア人かなと思ったら、れっきとしたフィラデルフィア出身で、ケニー・バレル、ジェイムス・ムーディー、ダイアン・シュアラと共演してきております。リーダー作も2作あるんですね。

ウゴンナ・オケゴはヴィーナスが初期の時代に出版したピアニストのジャッキー・テラソンのベーシスト。独特の間の大きい、それでいてスピーディーなベースを弾いていました。

グラディ・テイトがここでは意外な出現です。相当の老境のドラマーです。それが完全に壮年を感じさせるドラミングで、トリオの重さの要因の一つになっているのがわかります。成功の人選です。

私にとって未永く光るCDになるでしょう。

寺島靖国